

国立民族学博物館の収蔵品 ⑤2

イスラーム書道

イスラームでは偶像崇拜が禁じられていることから、聖典コーランの章句などを美しく書きあげるイスラーム書道（アラビア書道）が発展した。

二八文字からなるアラビア文字（ペルシア語などでは若干文字数が增える）にはいくつかの書体がある。当初は素朴な形だったが、アッバース朝のころになると装飾の多い流麗な書体が生み出されていった。聖書の写本には具象的な挿絵が入るものが多いが、コーランの写本には意匠をこらした装飾文字で書かれたものが多い。写本以外にも、コーランの章句や有名な古典詩を書いて、幾何学模様や動植物などの形にまとめることもある。国立民族学博物館の西アジア・セクションには、ハサン・マスウーディーによるアラビア語のイスラーム書道が展示されている。



イスラームでは、コーランを美しく書きあらわすためにイスラーム書道が発展した。与謝野蕪村の俳句「月光西にわたれば花影東に歩むかな」のフランス語訳をイスラーム書道で表現した作品。制作者：ハサン・マスウーディー、国立民族学博物館所蔵。

パリ在住のハサン・マスウーディーは一九四四年にイラク南部にあるナジャフで生まれ、十七歳までをこの町で過ごした。この頃からイスラーム書道を始めて評判になり、単身、バグダードに向かうと高名な師についた。バグダードには八年間滞在し、葦ペンを用いた古典的なイスラーム書道の技法を身につけた。二十五歳になった一九六九年、政治的混乱を避けてフランスに渡り、パリのエコール・デ・ボザール（国立高等美術学校）に入学。美術学校では西洋美術を学んだが在学中もイスラーム書道の製作は続けていた。

一九七九年、パリを訪れていた日本の書道家による大筆を用いたパフォーマンスからインスピレーションを受け、伝統的な葦ペンではなくて刷毛などを用いた作品を手がけるようになった。紙に書いた作品以外にも音楽家などと組んだパフォーマンス活動、バレエの舞台デザインなど幅広い分野で活躍しており、イスラーム書道を代表する一人とみなされている。

ハサン・マスウーディーは、古今東西の文学作品の一節を題材にして作品を製作しており、その中にはアラビアンナイト（千夜一夜、千一夜とも）の一節、十三世紀イランの大詩人ルーミーをはじめとする古典詩、列子などの中国古典なども含まれている。画像は国立民族学博物館に展示されている「蕪村」と題する作品（二〇〇五年製作）。江戸時代の俳人と謝野蕪村の「月光西にわたれば花影東に歩むかな」がアラビア語で書かれている。

（西尾哲夫）